

# 『本朝水滸伝』 試論

## ——<sup>はたのかなあきら</sup> 秦 金 明 の最期に関する一考察

渡邊 さやか

### はじめに

建部綾足『本朝水滸伝』（前編、安永二年（一七七三）刊）は八世紀の日本を舞台にした長編歴史小説である。本作は『水滸伝』等漢籍との関係が指摘される一方、『続日本紀』『前々太平記』といった日本の作品を典拠としていることも先行研究により明らかにされている。だが作品全体の原拠及び典拠としてのこれら三作以外、他にどのような作品が本作に影響を与えているかについて詳しく検討した研究はまだあまりない。そこで本発表では後編に登場する「秦金明」という人物のエピソードを取り上げ、これがどのような作品から影響を受けて作られたエピソードなのかという点を中心に内容の分析をおこなっていききたい。

### 1. 金明と『史記』

#### 1.1 忠臣として描かれる金明像

秦金明は本編第四十一条、及び第四十五条に登場する。この人物は大宰府の長官・阿曾丸の家臣であり、道鏡の権威を借りて悪政を行う阿曾丸とは対照的に、常に主君と民衆を第一に考える忠臣として描かれている。まず第四十一条と第四十五条の内容を見てみよう。（第四十一条）

公務から帰った金明は、妻子から阿曾丸夫妻の専横により大宰府の政治が乱れきっていることを聞く。金明は阿曾丸に正しい政治を行うよう諫言するが、阿曾丸は全く聞き入れない。金明は諦めず、次のように言って更に諫める。「愛しい妻子であっても主君のためには塵芥も同然と考えて仕えるのが臣の道だといいます。だから私は主君のためには命も惜しみませんし、妻子も惜しみません。御心を改めて下さるまではいつまでもお諫め申し上げます」。阿曾丸は「その詞に間違いはないだろうな」と言って金明の妻子をその場に引き出させ、金明の目の前で斬り殺す。ところが金明は顔色ひとつ変えなかった。そこで阿曾丸は仕方なく金明の命は助ける。

（第四十五条）

妻子を殺された後も、金明は諫言を続けるが、阿曾丸は全く受け入れない。もはや神の力に頼るしかないと考えた金明は、香椎の宮に籠もり祝詞を唱えてひた

すら主君の改心を祈り続ける。そして飲まず食わずで七日七夜祈り続け、息も絶え絶えになった時、金明の姑がそれを見つけて介抱する。だが助かった金明は喜ばず「祈りが神に通じたならば、きっと主君が私を呼び返し、今までの罪を悔やんで下さるはずだった。しかし今日まで七日もそうしたことがなかったのは神が祈りを聞き入れなかったということなのだろう」と落胆する。そして助けた姑にも「自分と共に祈り、霊験が顕れなければ死のう」と言って祈り続け、遂に二人とも宮の前で餓死する。

このように金明は、我が身を顧みず諫言を繰り返し、何があっても主君に恨みを抱くことのない、徹底した忠臣として造型された人物である。その忠誠ぶりは間に挿まれる妻子の斬殺や祈祷の上での餓死といった残酷なエピソードにより一層強調される。中でも印象深いのが〈餓死〉という最期の描かれ方ではないだろうか。金明が単に人格者であることを読者に伝えたいだけならば、諫言後阿曾丸の怒りに触れて殺されるといった書き方でも充分だったと考えられる。しかし、そのように死の原因を阿曾丸に求めるのではなく、金明が主君を思うあまり却って自ら死に臨んだという書き方をすることによって、忠義心の純粋さがより際立つ結果となっているのだ。

#### 1.2 金明と伯夷叔斉

この金明の最期に関して参考にされた逸話等はあるのだろうか。諫言そして餓死という金明の最期は『史記』列伝冒頭に登場する伯夷叔斉のエピソードを彷彿とさせる。伯夷叔斉は武王への諫言が容れられなかったことから、周へ仕官することを拒み首陽山に籠もって餓死した。以下の引用は『史記』伯夷列伝の餓死のくだりである（1）。

而るに伯夷・叔斉之を恥ぢ、義もて周の粟を食はず。首陽山に隠れ、薇を喰ひて之を食ふ。餓ゑて且に死なんとするに及び歌を作る。其の辭に曰く、彼の西山に登り、其の薇を喰ふ。暴を以て暴に易へ、其の非を知らず。神農・虞・夏、忽焉として

没はる。我安くにか適帰せん。干嗟、徂かん、命之れ衰へたり、と。遂に首陽山に餓死す。此に由りて之を觀れば、怨みたるか、非ざるか。

金明は主君の改心を祈るために断食し餓死したのであり、伯夷叔斉とは行動の動機に違いが見られる。但し共に諫言が容れられなかった結果山や森に籠もって餓死したという点は一致している。しかし、これだけの一致では偶然的類似であることも考えられ、伯夷叔斉のエピソードが参考にされているかどうかは分からない。

だが、もう一つ注目したい点に、金明や阿曾丸がしばしば発言の中で『史記』等の漢籍に現れる賢人に言及していることがある。第四十一条における金明と阿曾丸のやりとりでは、屈原・文王・比干といった高潔の士として知られる漢籍中の人物が次々と挙げられ、双方の発言においてこれらの人物像は積極的に金明自身と重ね合わされる。これは漢籍中の賢人たちのイメージを仮託することで一層金明自身のもつ高潔性や忠義心を強調する効果を狙ったことだと思われる。特に文王・比干など『史記』に登場する人物の故事が引かれる点からは作者が『史記』を利用していたことが窺える。これらの点から第四十五条における金明の餓死も『史記』伯夷列伝に見られる伯夷叔斉のエピソードを参考に書かれているのではないかと思われるのである。

## 2. 金明の仮死について

### 2.1 伝説との類似性

ところで金明は『史記』の伯夷叔斉と異なり、失われかけた命を一度姑によって助けられた後で姑ともども餓死している。この展開は『史記』伯夷列伝を参考にしたものではないようだ。では、金明の話の場合なぜ「姑によって一度は助けられる」という展開が付加されたのだろうか。姑の老婆は第四十五条に登場する。娘である金明の妻と孫たちを阿曾丸に殺されて嘆き暮らしていたが、賀の金明が香椎の宮で断食していると聞きつけて駆けつける。そして宮の前で正体を失った金明の姿を見つける。この場面で老婆はうすく煮た粥を指鍋に入れたものを竹の管を通して金明に与えている。「老婆は金明を介抱した」と簡単に記しても話の進行上は問題なかったと思われるのに、介抱の場面は粥を調理し与えたことも含め詳細に記される。姑が金明を助けた点、粥を与える過程が詳述された点、これら二点がこのエピソードに及ぼす効果とは何だろう。

ここで注目したい老婆の発言がある。それは「けふ

已に七日の願ひは終りなん、扱も夜日をわかで、かくあらき行ひをしつるによりて、かゝらん」というもので、「あらき行ひ」という表現により老婆が激しい苦行を金明の衰弱原因と考えていることが分かる。激しい苦行によって衰弱し、命も失いかねないところを一杯の粥によって助けられた人物というシッダルタ太子、即ち釈迦の説話が想起されないだろうか。

成道前のシッダルタ太子が六年に及ぶ激しい苦行の果てに苦行のみでは悟りを得ることが出来ないと理解し、尼連禪河で沐浴し付近の林で休んでいた時、たまたま林を通りかかった牛飼いの娘スジャータが乳糜を与え、回復した太子はその後菩提樹下で成道を果たす。この話は『過去現在因果経』第三巻を典とし、『今昔物語集』巻第一「悉達太子於山苦行語第五」等にも紹介されている。若年の頃、一時は説教僧を生業とし仏典に触れる機会の多かった綾足はこの話を知っていたと見られる。金明のエピソードと伝説では主人公が激しい苦行で弱り果てる点と女の与えた粥により回復する点が一致している。そこで、金明を助けるのが姑であることや与える食品が粥であることは、作者がこのエピソードを書く際に伝説を意識していたことの表れだと考えれば理解や説明がしやすい。釈迦という誰もが知る存在のイメージを重ね合わせることで一層金明の非凡で高潔な印象を強める効果が期待できるだろう。また、神道に則って祈祷を行う金明のエピソードが伝説の神道における置換になっているとすれば興味深いことである。

しかし今のところ内容が類似しているというだけで伝説がこのエピソードの下敷きであると確定できる要素はない。『本朝水滸伝』の他の箇所にも伝説を原拠とする話があるのか等、引き続き調査が必要だろう。

### 2.2 大穴牟遲神話からの示唆

なお『古事記』にも死んだ息子を母親が生き返らせるという、金明のエピソードとの共通性を感じさせる話がある。兄の八十神に迫害された大穴牟遲神を母の刺国若比売が二度にわたり助ける話である。国学者でもあった綾足は記紀神話から多方面で強い影響を受けており、この神話の存在も見過ごせない。最初に大穴牟遲神が殺された時は母の祈りによって天上から<sup>きさ</sup>貝比売(2)と蛤<sup>がい</sup>貝比売が遣われ、この二人の女神が塗った「母の乳汁」によって大穴牟遲神は蘇生する。この「母の乳汁」は貝を原料に作った火傷薬の名であるとも母神の乳であるとも言われており何を指すかについては諸説ある。しかしいずれにせよ、この神話における「母の乳汁」の役割には子供を産み育てる母の

生命力をもって死者を再生させることを期待する上代人の考え方が表れているだろう。これを踏まえて再び金明のエピソードに目をやった時、瀕死の金明を助ける存在が姑であることにもまた異なる意味合いを見出すことができないだろうか。姑は義母ではあっても金明にとって〈母〉にあたる人物であり仮死に陥った彼を蘇生へ導くのにふさわしい存在である。また、ここで与えられる食品が母乳や離乳食を思わせる「粥」であることも示唆的に思える。そこで典拠、原拠であるとはまでは言えないかもしれないが、こうした神話や伝説の影響を受けながら『本朝水滸伝』でも姑が瀕死の金明に粥を与えるという行為が死と再生の暗示として機能していた可能性は充分指摘できるのではないだろうか。

## おわりに

ここまで、秦金明像が『史記』の伯夷叔齊像を参考に造型されたと見られること、及び金明のたどる仮死と回復という行動が伝説や『古事記』のエピソードに影響を受けて書かれた可能性について述べた。またこの仮死と回復という行動を一種の暗示的表現として読むことが可能であることを指摘した。『本朝水滸伝』には金明のように仮死に陥るほどの苦難を経た後、復活を果たして活躍する登場人物が多く現れる。例えば巨勢長谷は足柄山で困窮していたところを別の勇士に救

われ高橋足柄と改名して活躍するし、藤原豊成は遊女と駆け落ちして逃亡生活を送った後白猪老夫と名を変えて財を築く。金明は、彼らの多くのように、仮死という苦難を経た後改名や転職を果たすことはない。だが最後まで忠義心を貫いた死を迎えることは「活躍」と見なせるだろう。勇士達の再生を経た上での活躍がどのような意味をもつのかについては引き続き検討していきたい。

作中で秦金明が登場するのは第四十一条、第四十五条の二条のみであり、この人物が打倒道鏡をめざす他の勇士達と直接関わることはない。だがその末期の様をもって暗に阿曾丸の非道を強調し、討伐の意義を明確にしたという点で彼が作中で果たした役割は大きいと言えるだろう。

## 注

1. 引用は新釈漢文大系八八『史記 八（列伝一）』（水沢利忠著、明治書院、一九九〇）による
2. 二部は〈討〉＋〈虫〉

本文引用は全て新日本古典文学大系七九『本朝水滸伝 紀行 三野日記 折々草』（高田衛 田中善信 木越治 校注）（岩波書店、一九九二）によった。引用に際してルビを省略した。